

2008年（平成20年）4月3日（木曜日）北海道新聞（夕刊）

### < 3月 札幌で無理心中事件2件 >

#### 介護苦 見えぬサイン

#### 病床削減で増える在宅

札幌市清田区と手稲区で3月中旬、相次いだ母娘の心中事件と夫婦の心中未遂事件。警察はいずれも在宅介護に疲れた果ての事件とみているが、加害者は周囲に思い悩む様子を見せていなかった。高齢者が長期入院する療養病床削減などで在宅介護の流れが進む中、こうした事件の増加が懸念され、専門家は「介護者の異変に気づける環境づくりが必要」と指摘している。

「ご迷惑をおかけしました。疲れました...」。3月16日、札幌市清田区の無職女性（58）が、同居する実母（84）に手をかけて自宅で無理心中した事件。居間には、こんな書き置きが残されていた。関係者によると、実母は認知症で週2回ほどデイサービスに通っていた。深夜に突然外出しようとすることもあり、常に目が離せなかったという。

加害者の女性は、同市内の研究施設で2006年夏までパートで勤務。その後、自宅で夫（61）とともに実母の世話をする生活に入った。登山やテニスなどが趣味で活動的だった女性は昨秋、菓子折を手元に元の職場を訪ねたが、介護の苦勞を漏らすことはなかった。元同僚の男性は「あんなに明るい人なのに。信じられない」と驚く。

この事件の翌日、同市手稲区内では無職の男性（73）が自宅で妻（60）の首を絞めた後に、首つり自殺する事件も起きた。妻は一命を取り留めたが、男性が自宅で世話をしている介護度の重い妻の難病を苦に、無理心中を図ったとみられる。男性は数年前から妻の介護をしていたが、自宅の暖房のために、まきを積み上げたり、家にペンキを塗る姿など、周囲には活発な印象を与えていた。

#### 異変に気づく環境必要

電話相談などで介護者の心のケアにあたる北海道認知症の人を支える家族の会（札幌）によると、実母を介護する女性から切羽詰まった声で「母に手をかけてしまいそうだ」と相談があったり、義父の介護に疲れ、「私を殺してください」と口走ってしまった女性もいたが、これらは特別な例ではないという。厚生労働省の調査では、高齢者の介護をする家族の4人に1人が軽度以上のうつ状態で、介護者が65歳以上の「老老介護」では、介護者の3割以上が「死にたいと思うことがある」と回答した。

高齢者の生活支援に取り組むNPO法人シーズネット（札幌）の石見太市代表は「在宅介護は症状が重くはなっても軽くなることは多くの場合、期待できず、介護する側にとって出口が見えない」と指摘。「在宅介護への流れが強まっており、心中事件などの危険性は高まる」と訴える。

北海道医療大看護福祉学部の石川秀也教授（高齢者福祉）は「自宅での家族介護は外部との関係が希薄になって孤立感を強く感じ、ストレスが高まる傾向がある」と指摘。「ケア

マネジャーだけでなく、行政の担当者も在宅介護家庭を訪問し、暮らしぶりを把握するなど、外部に救いを求めるサインに気づける環境づくりが必要」と話している。



介護者からの電話相談に応じている北海道認知症の人を支える家族の会。在宅介護をする人からの切実な悩みが多い